

令和 元年 8月 1日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201880222

氏名 西村 美咲

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

- 派遣先：都市名 パリ (国名 フランス)
- 研究課題名（和文）：シャルル・ノディエと「幻想」の精神性
- 派遣期間：平成30年8月1日～令和元年7月31日 (365日間)
- 受入機関名・部局名：パリ第4大学
- 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

派遣先で従事した研究内容

本研究の内容は、19世紀フランスの作家シャルル・ノディエ(1780-1844)の小説を同時代の思想背景を考慮して分析することだが、今回のパリ滞在中は、とりわけ彼の幻想小説を対象にして考察を行った。滞在中の研究の目的は、後世の認識に基づいて考察される傾向にあるノディエの幻想小説を、当時の時代状況を踏まえて再考することにあつた。ノディエはフランス文学史において、幻想文学の始祖と考えられている。今日において「幻想文学」は一つの文学ジャンルとして成立しているが、これは20世紀以降に確立し始めた概念である。先行研究においては、20世紀以降に生まれたこの幻想文学ジャンルの概念に基づきながらノディエの小説の分析が行われてきた。これによりノディエの巧みな小説の技法が明らかになったが、一方で19世紀当時の時代性に基づいた物語内容の考察は充分ではなかった。そのため本研究は、同時代の認識に基づきながらノディエの幻想小説を分析することで、新たな解釈を提示することを試みた。

研究状況

上記の目的意識のもと本研究が考察した作品は、ノディエの最初の幻想小説と評される短編作品『一時、または幻影』(1806)である。同作が執筆された当時、フランス革命がもたらした政治的、思想的動乱を経て、人々がキリスト教に代わる思想体系を模索していた。本研究では、文学と宗教的な思想との関係を専門とする、パリ第4大学のドミニク・ミエ＝ジェラル教授に方法論を学びつつ、宗教的な思想の模索という観点から『一時、または幻影』を分析した。その結果、ノディエが自身の作品を通じて、人間の意識や魂を高みに上げる精神主義的な思想を示そうと試みていたことが明らかになった。その後、ノディエの代表的な幻想小説である『パンくずの妖精』(1832)を考察し、

ノディエが、読者を楽しませながら上記の思想を提示するために幻想小説を執筆していたことが分かった。これにより、思想家としてのノディエ、そして思想書としての幻想小説という先行研究では指摘されてこなかった新たな側面を浮かび上がらせることができた。

6.研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

研究成果発表等の見通し

派遣期間中に得られた研究成果は、まず一部を論文として執筆し、2019年9月に『Bulletin Annuel d'Études Françaises』の第53号に投稿する。その後、10月26日に日本フランス語フランス文学会全国大会にて口頭発表を行う。さらに、11月に行われるソルボンヌ大学若手研究者主催の研究会「ErudiXIX」にてフランス語で口頭発表を行う。そして、2020年はフランスで研究を発信することに一層重点を置く。ジャン＝マリ・ルーラン教授が主催する研究会「1800年—1780年から1830年までの文学—」にて口頭発表を行うことに加え、フランス人の研究者たちが主催する「ノディエ研究会」にて口頭発表を行ったのち、同研究会が刊行する研究誌に論文を投稿する予定である。またこれらと並行して、2021年の提出を見据えている博士論文の執筆を進め、今回の派遣中に得た成果をその一部とする。

今後の研究計画の方向性

今後の研究では、考察の対象とするノディエの作品の幅を広げることに加え、同時代の他作家の作品も分析することを考えている。具体的には、派遣中はノディエの幻想小説を考察の対象にしたが、今後は彼の旅行記や評論、戯曲などのテキストを幅広く扱う。これまで一つの視座のもとで考察されてこなかった様々なテキストを、滞在中の研究で得た結果、すなわち思想家としてのノディエの側面、そして思想書としての彼の文学作品という観点から分析を行いたい。これにより、ノディエの新たな作家像を提示することが可能となる。それと並行して、同時代の他作家の作品を考察するが、このさいも思想的な側面に着眼する。19世紀フランス文学の専門家であるポール・ベニシューが指摘していたように、当時の作家はノディエと同様に、文学を通して普遍的な道徳を示し、人々の精神を高めることに尽力していた。これを踏まえて、ノディエが他作家から受けた影響、あるいは後世の作家に与えた影響を探る。これにより、同時代の文学潮流におけるノディエの位置づけをより明確に提示することができる。以上のような研究を行うことで、フランス文学史におけるノディエの重要性を明確に示すことに加えて、小説がどのように人間の精神性に関わってきたのかという文学のあり方についても探ってゆきたい。

7.本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

受入教授からの指導、ならびに第一線の研究者や研究者を目指す学生との交流

本プログラムを通して、パリ第4大学のドミニク・ミエ＝ジェラル教授から直接指導を受けることができたが、これは本研究の方法論を固めることを可能にしたほか、目指すべき研究者像を確認することに繋がる重要な経験となった。ミエ＝ジェラル教授は、研究の基本的な作法を熟知し、伝統的な分析方法を用いることを重要視していた。この姿勢で文学作品に真摯に向き合うことが、今後、報告者が目指すべきものであると考える。

また、第一線の研究者が主催する研究会に参加したことで、現在のフランス文学研究の最新の動向を感じることができた。そこで多くの研究者たちと意見交換をしたことにより、本研究の分野についてより専門的に理解を深めながら、視野を広げることが可能となった。さらに、研究者を目指すフランス人の学生と交わした学術的な議論から、国内では得ることのできない刺激的な知見を得た。この経験をふまえて、今後報告者は、国内だけでなくフランスをはじめ海外において広く研究成果を発信してゆき、研究内容を磨いてゆくことを目指す。